書評

田和正孝『石干見（いしひび）の文化誌――遺産化する伝統漁法』

■出版地：京都　■出版社：昭和堂　■出版年：2019年　■総頁数：288頁　■定価：4,800円＋税

辻　貴志*

著者は関西学院大学教授であり、漁場利用や漁具研究を人文地理学の視座から牽引し、とりわけ石干見研究に研究人生のほとんどを費やしてきた石干見研究の世界的権威である。本書の目的は、世界的に消えゆく石干見について早期に記録し、その漁撈文化や歴史に関する研究に問いを投げかけることにある。

本書はⅢ部から構成され、第Ⅰ部は日本の石干見研究、第Ⅱ部は台湾の石滬（チューホー）（石干見）研究、第Ⅲ部は今後の石干見研究の方向性や可能性について議論している。

石干見とは、沿岸部に岩塊やサンゴ石灰岩を馬蹄形や半円形、方形に積んで構築した大型の定置漁具である。大きさは海岸に沿って約150～200メートル、沖に向かって100メートル程度である。高さは、積み上げた石が満潮時に海面下に没し、干潮時に周囲と分断できるように設定されている。魚群が満潮時に石干見内に入り込み遊泳・摂餌し、干潮時に沖に戻る習性を利用して、干上がった石干見内に取り残された魚を漁獲するといった特徴を有すると著者は説明する。このように石干見は、潮位の変化を利用した単純な漁法である。たいした道具も必要とせず、人類の原初的な漁具・漁法と位置づけられる。

著者によると、石干見は、台湾、韓国、フランス、スペイン、フィリピン、インドネシア、ミクロネシア連邦、オーストラリア、カナダ、南アフリカ、日本で確認でき、干潟やサンゴ礁域に分布する。日本では山口県、北・西九州一円から鹿児島県の離島部、そして南西諸島で確認できる。現在は、沿岸開発や漁撈技術の発達により、石干見漁に従事する空間と余地はほとんどなくなった。

しかし、最近になって石干見の保全と復元が九州各地ではじまり、市民団体や有志による情報交換の場である「石干見サミット」が立ち上げられた。石干見は環境教育や生物多様性を育む物質文化として注目されている。世界においても、石干見の保全や研究、先住民の文化としてのデータベース化、歴史・文化遺産化が進んでいることに著者は着目する。

第Ⅰ部「日本の石干見」は全5章からなる。第1章では、石干見研究の系譜を確認する。日本の石干見研究は、1950年代から1970年代にかけて海洋民族学者の西村朝日太郎によって先導された。石干見は干瀬と呼ばれるサンゴ礁群における漁撈文化の表徴として注目され、その構造や利用方法・所有形態が研究対象となり、西村は石干見の学術的価値を発信することに大きく貢献した。しかし、1980年代以降、魚類資源の枯渇、沿岸開発や石干見の所有者の高齢化にともなう石干見の数の減少により、石干見研究は停滞していった。1980年代後半から2000年になると、沖縄の石垣島新石垣島空港建設反対運動と多辺田政弘により提唱された「コモンズ論」が相まって、海の入会地における石干見漁の重要性が再認識されるようになった。本章は、こうした石干見の研究動向の変化を解説する。

第2章「石干見研究の問題群」では、現代における石干見研究の可能性を検討する。近年、近代期の石干見に関する文書資料が日本各地で発見され、当時の石干見漁の姿が明らかになりつつあることを紹介する。また、「石干見」の呼称の由来についての研究や、各地域の石干見の呼称、分布、利用、所有形態のデータベース化による比較研究も不可欠とする。とりわけ、石干見が生計維持にいかに関わっているのかを対象とする漁撈活動の側面に関する研究は、沿岸域の生活文化に占める石干見の役割を解明し得ると述べる。石干見の保存・再生・活用に関する研究では、海域利用の権利、関係主体との連携、伝統的および科学的知識の

* 佐賀大学

分析、内発的地域活性化、沿岸域の保全も考慮するべき課題として取り上げている。そして、石干見を文化財、環境教育、ツーリズムの資源とし、里海を活性化させる動きが出てきていることも研究との接点が見出せると説き、今日の石干見研究の進展に期待を込める。

第3章「石干見の呼称に関する考察」では、石干見の呼称を分析する。さまざまな見解があるなか、著者は石干見を「石でできた簗（ひび）」（「簗」とは木や石で水をせき止めて流れ込んできた魚を捕る漁具「やな」の意）と推論し、「石干見」という語は古くとも1880年には使用されていたことを突き止めている。九州地方では「スクイ」および「イシヒビ」、沖縄では「カキ」が一般的な呼称であるが、地域によって微妙な違いがあることを示し、今日まで残ってきた石干見の地方名を丹念に記録し石干見の呼称の分布域と記憶実態を明らかにした。

第4章「島原半島の石干見（スクイ）漁業」では、島原半島における石干見の数の変化、利用と所有、魚の取り扱われ方を検討する。歴史資料をもとに、島原半島では1892年には215基の石干見が確認されたが、現存するのは文化財に指定されている1基のみである。石干見は個人所有であるため、親族が権利を継承したり、権利を賃貸したりするものでもあった。日中・夜間を問わず石干見は利用され、シラス、ボラ、イワシ、イカといった魚介類の漁獲が可能であった。石干見の利用は自給的で自家用に魚介類を得ると考えられてきたが、魚介類の販売もおこなわれており、必ずしも自給的ではないことを著者は突き止めた。

第5章「開口型の石干見」では、一般的な石干見の形状である馬蹄形、半円形、方形と、沖側の石積みを連続しておこなわない九州、奄美大島、沖縄で確認できる開口型の石干見の大きさと形状、および補助漁具、漁獲対象に焦点を当て石干見の形態に迫った。大分県宇佐市長州の事例では、開口型の石干見の全長は300～600メートル、石積みの高さ0.7～1.0メートル、幅3.0メートル、開口部は3.0～4.0メートルほどで、開口部には袋網を設置して沖へ出ようとする魚群を捕った。イワシ、ボラ、カレイ、クロダイ、コチ、コノシロ、サッパ、アキアミ（エビの一種）が漁獲できた。また、補助漁具としてウナギグラという石積みを利用してウナギが漁獲された。本章では、著者は、開口型の石干見をもうける理由として、潮位変化や、魚の接岸する場所を要因として明らかにし、開口部は魚群をあえて逃すことで資源の有効利用と保護に貢献している可能性を示した。

第Ⅱ部「台湾の石滬」は、全3章からなる。第6章「台湾における石滬研究史」では、日本統治時代の台湾総督府の資料にもとづき、台湾の石滬の構造、漁獲量、所有と利用、漁場紛争をひもとく。1917から1918年の調査では台湾には317基の石滬が確認でき、湾形、馬蹄形、半円形を呈していた。澎湖列島沿岸部の吉貝嶼の石滬は、全長900～1,800メートル、高さ1.6～2.0メートルであった。年平均300トン前後の漁獲があり、キビナゴとカタクチイワシが多かった。石滬による漁撈は、資源をめぐり焚入抄網漁（松明を用いた網漁）との間で対立した。日本による統治が終了した1945年以降、石滬は経済的視点から重要視されなくなり、調査研究も停滞した。1990年代になり台湾の研究者による漁業地理学的研究が発端となり観光資源としての石滬研究が再興し、2000年以降、石滬は「在地文化」の見直しにより文化遺産として価値づけられるようになった。本章では、台湾での石滬研究の基礎的情報および動向を明らかにした。

第7章「1910年代の台湾本島における石滬漁業」では、日本式漁業の台湾への導入が台湾総督府によって図られるなかでの、石滬の漁場利用の状況を追究した。台北庁芝蘭沙崙仔では、石滬の7割が個人所有であり、個人が複数の石滬を所有していた。また、共同所有の場合、27人で5基の石滬を管理し、自家消費用の魚類を漁獲したあと、余剰分は娯楽費を得るために販売していたと考えられる事例も確認された。入札によって毎年石滬を貸し出し、賃貸料を得るとともに、石滬による漁と農業を併行していたことも台湾総督府文書の解読から復元を試みた。

第8章「澎湖列島北部における石滬の利用と所有」では、台湾総督府が残した石滬漁業権申請書類をもとに、1910年代の澎湖列島北部の石滬漁業と所有の状況を分析する。澎湖列島北部では、石滬は178基存在し、有滬房滬という半円形石堤に捕魚部をもうけたタイプが61％を占めた。構築年代の古い石滬は1700年代初期と推定され、大半は父から子へと相続され、持分の買い受けも認められた。石滬は共同利用され、おもに漁獲した魚を自家消費するために使われていたと推察される。本章では、歴史資料をもとに澎湖列島北部における石滬の使用方法を検証し、農業のかたわらの「おかずとり」として石滬を利用した漁業労働形態の過去の姿を導き出した。

第Ⅲ部「新たな石干見研究に向けて」は、2章からなる。第9章「大西洋沿岸域における石干見研究の現在」では、世界における石干見の分布について考古学との関係から現状を指摘する。とりわけ、大西洋地域のなかでも南アフリカ共和国、イギリス、フランスに着目し、近年のとくに水中考古学が石干見をはじめとする定置漁具研究に関心を寄せるようになった背景として、石干見の年代学的把握、先住民の漁撈文化の解明のほか、石干見を文化遺産としてとらえるようになったことを挙げる。さらに、石干見研究は、世界的にはもはや個人レベルの研究ではなく、大型の資金を得たプロジェクト型の文化遺産調査として展開されている段階にあることを示し、日本の石干見に対する研究や保全の遅れに釘を刺す。

第10章「石干見の文化誌」では、今後の石干見研究の素材を挙げる。石干見漁に関する記録の蓄積は、漁具・漁法自体が衰退し放棄された1960年代で終焉を迎えたとされるが、過去の記録に補足することで、石干見の地域文化誌の継続につながることを問題提起する。石干見を復元・活用する市民団体の増加の動きを記録し、発言と行動をしていくことも研究者の新しい役割であると指摘する。サンゴ礁と石干見の分布域、潮位差と石積みの技術、潮汐・潮流、魚類の行動や季節性といった生態学的研究ならびに、石干見の生計維持、時間利用技術、漁獲、分配といった社会的研究を複合させた通文化的研究も、石干見漁の記憶を有する人びとが限られる状況下で調査研究を急がなくてはならない課題である。そして、石干見の重要性に気づき、石干見を復元し環境教育や観光産業に普及させていくこともとめられている。石干見は、人間と環境との関係、地域や共同体における社会関係を明らかにできる可能性を有しており、石干見研究に残された課題が山積していることを著者は本書の最後で吐露している。

以上、本書は、著者の石干見研究の軌跡と最新の研究成果について盛り込んだ点で、石干見の文化誌として貴重である。現代の日本では遺物と化した石干見の存在価値とくらしのなかに石干見があることの文化的豊かさを追求する著者が、石干見研究者として孤軍奮闘する様子も表されており、石干見をめぐる研究をとおして社会の無理解を啓蒙しようとした努力が見て取れる。しかし、評者は長年にわたり著者の研究に注目してきたが、著者の九州、沖縄、台湾といった他の東アジアの石干見に関する業績（田和 2007、2014、2017）とくらべると、本書は石干見の形態、社会文化、現代への応用を中心に、内容や議論の方向性において新たな知見に乏しい。とくに、石干見の分布、形態、構造、用益、漁業史についてこれまでの研究をなぞらえる、あるいは振り返る傾向がうかがえる。しかし、わずかながらでも、新たな研究の進捗状況と要所を時宜に知らしめる姿勢が本書では貫かれている。著者は微細な部分を精緻に突き詰めることで新たな知見を取り込もうとしており、地味ではあるがそのひたむきさに敬服せずにはいられない。本書は石干見研究の専門書として高い価値を有するが、以下、おもに批判的観点から評価する。

日本の石干見文化が、研究においても社会においても膾炙しておらず、ただ廃れていく現状にあることを著者は危惧しているが、そこで記述と思考を停止しない点に本書の意義が認められる。第Ⅱ部「台湾の石滬」に見られるように、著者は日本にくらべて石干見文化が残存する台湾での研究にも力を注ぎ、石干見研究の展開とその可能性を追求し、石干見研究に余念がない。

著者は、台湾に残る日本統治期時代の台湾総督府の歴史資料を渉猟し、台湾の石滬文化を解明することで、日本ではほとんど見られなくなった石干見利用の文化や歴史の復元を試みた。そして、石干見と石滬の共通性を示した。ただし、石滬の存在と歴史は明らかにされたものの、本書では石滬の今日における実用的側面については触れられていない。また、石滬は、実用的な利用がなされなくなったことから文化遺産とみなされるようになったが、実際の石滬が生活のなかで実践されるためのプロセス、他の生業や社会文化との関係が明らかにされていない点については今後の課題であろう。

本書では生活のなかでの石干見の実用的利用について情報が乏しい。評者はフィリピンで石干見の存在を確認しており、今日でも利用されているとの情報も得ているが、未だに利用の場面に遭遇していない。その理由として、潮の状態に左右され、石干見にアクセスすることが容易でないこと、石干見漁に従事する人びとの数が少ないことが挙げられる。そこに、石干見研究のさらなる可能性があり、調査領域を拡大する意義は大きいと言える。フィリピンの場合、石干見にある程度の魚類（おもにゴンズイ）が入り込んだ際に不定期に網を用いた石干見漁がおこなわれているが、今後、十分な実見にもとづいた研究が待たれる。

評者が石干見の利用に関心を寄せるのは、評者もまたフィリピンで石干見を含む沿岸での漁撈活動の調査に従事し、石干見漁に強い関心を抱いているからである。とくに、石を工夫して積み上げ、潮汐や魚類の回遊ルートといった自然を読み、魚類を捕る楽しみの要素が石干見に埋め込まれている自然利用および物質文化の技術に魅了されている。現在、評者が研究を展開しているラオス南部の先住民族の水田漁撈と、魚を捕る仕組みが類似していることも関連している。乾季と雨季の河川の水位差を潮汐と同じように利用した水田漁撈は、石干見と同じような、魚類を捕る楽しみに満ちた生業であり、開口型の石干見のように水田を開口し、そこに網や竹製の筌を仕掛けて、手網やさで網といった補助漁具で漁獲する点など共通点が多い。

しかし、著者は「石干見研究の伝統」、すなわち石干見だけを取り上げて民俗学・文化人類学・地理学的研究をおこなっており、「多様な定置漁具を一括して議論することは困難であると考えてきた（p. 197）」。著者は石干見に固執する姿勢を貫いているが、評者は他の漁具や漁法との関連のなかで石干見を論じて動態的な民族誌の側面を拡充したほうがよいのではないかと考える。実際、本書をはじめ著者の一連の石干見研究からは、生態、地理、歴史、文化、社会、物質文化といった重要な要素はとらえられているものの、肝心の「人との関わり」がほとんど見えてこない。それは、今日、石干見がほとんど実用的に利用されていない限界にもよるであろう。著者の専門である人文地理学の目標は、人間の営みを明らかにすることにあるが、解明するためには人の行動を細やかに観察する必要がある。著者は歴史資料に主に依拠し過去の人間と石干見の関係を描き出しているが、先述したような人間行動に対する厳密な姿勢がうかがえない。過去の復元はきわめて重要な作業であるが、生の石干見と人間との関係の解明ができていない点に疑問と問題がつきまとう。

さらに、著者は、フランスの石干見についても調査をおこなっており、世界の石干見文化を地理学の観点から虱潰しに記載してきた。確かに石干見文化の地理的分布を記録することは有意味であるが、各石干見文化の連関を文化誌ではなく人類史の視座から検討する余地がある。たとえば、地理的に離れた人類や民族に石干見文化に似た考え方や行動が見られるため、石干見利用においても人類に通ずる食料獲得のための論理が埋め込まれている可能性がある。人類史における石干見の役割に関する研究は、まさに著者が注目する石干見データベースの構築と共有に進展をもたらすのではなかろうか。

一方、今後の石干見研究の課題について第10章でおおよそ示されているものの、著者が補い切れていない点は少なくない。たとえば、本書では触れられていないが、著者はフィリピンで現在でもおこなわれている石干見漁について体系立った調査研究をしていない。著者は、本書で自身が調査研究を完遂できなかった点を包み隠しなく示している。石干見研究と石干見の世界は読者にも開かれた領域であり、著者の業績を参考にしつつ新たな石干見研究と石干見との関わり合い方を構築し、後世に引き継いでいくことをささやかながら期待していると読むことができる。本書が、読者の石干見文化に対する理解と実践を期して編まれたことは、著者のこれまでの石干見研究、現在の石干見の置かれている状況、石干見の新たな活用と世界における文化遺産としての位置づけのされ方が丁寧に記されていることからもうなずける。

本書では、石干見サミットや市民団体による石干見の再評価の動きがあることを紹介しており、石干見の再現や復元が地域おこしやツーリズムの目的で遺産化している点を評価している。このような動きは好ましいと評者も考える。その一方で、実用的な石干見のある生活は、もはや不可能なのだろうか。歴史資料の発掘により、石干見利用の存在した過去を埋め合わせ、実態を具体化していくだけの研究でよいのであろうか。第9章では考古学の分野で世界的に石干見研究が注目されていることに触れ、世界の石干見研究から刺激を受けることで、日本の石干見研究が活性化する可能性があることを著者は示した。ここに、石干見を今日に問う学術的意義や社会的意義が認められ、石干見研究はその存続上の転換点にあると考えられる。本書の副題は「遺産化する伝統漁法」であり、本書をひもとくと石干見が遺産として新たな価値を帯びつつあることが理解できる。その点で、本書は石干見の過去と現在を書き留めるだけでなく、未来を見据えた研究へと発展するよう著者は願いを込めたと推察できる。評者は石干見の生業利用研究の蓄積を願うばかりであるが、すでに評してきたように石干見の実用的利用を中心とする人と石干見との関係こそ著者が具体的に明らかにできていない課題であり、著者をはじめさらなる研究が望まれると考える。石干見研究は時間との闘いであることも、本書において著者は伝えたかったに違

いない。

以上、本書は、石干見研究の萌芽と研究動向、石干見の実態と実際、世界の石干見、石干見の現代的価値について、地理学だけでなく、民俗学、歴史学、人類学の方法論から理解することを試みた石干見研究の最前線をゆく文化誌と評価できる。本書は、歴史的資料の分析にページを割いており、歴史に不慣れな人には退屈な側面があるかも知れない。しかし、行間を読めば、石干見研究および石干見との向き合い方を読者に伝えるための著者の偉業をうかがい知ることができる。本書が人類学者や考古学者、地理学者、民俗学者、歴史学者といった学究の分野だけでなく、行政関係者、市民団体、国際機関関係者のような石干見を利活用する知識や力を有した分野、そして石干見に関心のある一般読者に多く読まれることで石干見に対する社会的関心が高まることを期待したい。

参照文献

田和　正孝編

2007 『ものと人間の文化史135　石干見（いしひみ）』法政大学出版局。

2014 『石干見に集う――伝統漁法を守る人びと』（K. G. りぶれっと No. 37）、関西学院大学出版会。

2017 『石干見のある風景』（K. G. りぶれっと No. 42）、関西学院大学出版会。